

初ぼん

山家小学校4年 福田 夏帆

わたしのおおばあちゃんは、もういません。きょ年の夏が初ぼんでした。初ぼんの意味がわからず、お母さんに聞くと、

「おおばあちゃんのたましいが帰ってくる大切な日よ。」と答えてくれました。

おおばあちゃんは、野菜作りやおつけものの作りが上手で、手がゴツゴツしていて、こしがまがっていました。時々会つと、

「大きくなったねえ、何才になった?」

と、よくお話をしてくれました。

今、おおばあちゃんを思い出すと、わたしより体重が軽く、小さかったように思います。時々お母さんの生まれた家に行くと、おぼろさんが来てくれて、おまいりしてくれます。何かじゅもんを言っているように聞こえます。お母さんから、

「お線香、ろうそく、お花やおかしをおそなえしておまいりするよ、おおばあちゃんやおばあちゃん達がよろこんでくれるし、もしかしたら会えるかもしれないよ。」
と言っていました。よくお線香に火をつけながら泣いています。

「声が聞きたいなあ、ゆめでもいいから会いたいなあ。」
と、よく言っています。お父さんからは、

「長生きしようとか力しても、かなわない人もいる。じこや病気で、もうダメだと思っても、きせきのに一命を取りとめる人もいる。命は人の手では、のばせないからこそ大切なんだよ。あなたが生まれたこともきせきで、自分を大切にしてほしい。」

といつも言われています。

テレビやラジオで、悲しいことやこわい事けんもあります、お友達や周りの人に対して、やさしい心や思いやりを持つことが大切だと思います。

わたしも命があるかぎり、一生けん命生きようと思いました。おおばあちゃん、いつまでも、わたしを見守ってくださいね。